第４４回

和歌山県学校体育研究大会

有田地方大会

報告書

期　日　　令和４年１１月１１日（金）

会　場　　全体会会場　　広川町民体育館
　　分科会会場
　　小 学 校　　湯浅町立湯浅小学校
　　小 学 校　　広川町立広小学校
　　中 学 校　　湯浅町立湯浅中学校
　　高等学校　　和歌山県立耐久高等学校

主　催　　和歌山県教育委員会　和歌山県学校体育研究協議会

主　管　　第４４回和歌山県学校体育研究大会有田地方実行委員会

後　援　　有田地方教育委員会連絡協議会

大　会　役　員

【　会　長　】
森　　文哉

【　副会長　】
太田　謙二　　清水　　歩　　上野山達也（開催地実行委員会委員長）

【　顧　問　】
宮﨑　　泉　　清水　博行　　今西　宏行　　栗生　好人　　川嶌　秀則

【　参　与　】
田伏　利久　　安井　　卯　　橋爪　信也

【　委員長　】
鈴木　功太

【 副委員長 】
小杉　栄樹　　流川　鎌語

【　委　員　】
榊　　洋史　　森田　常義　　成瀬　憲弘　　松下　裕充　　阪口　貴史

和田　通尚　　坂本　融治　　高野　　勉　　宮西　紀行　　森下裕一郎

野村　裕之　　大畑　　眞　　井口　英夫　　廣田　隆弘　　古川　　一

増野　　彰　　小川　泰伸　　山田　充洋　　武市　　樹

有 田 地 方 実 行 委 員 会

【委 員 長】	上野山達也（御霊小）	
【副委員長】	森　　文哉（箕島高）	森川　博司（耐久中）
【事 務 局】		
事　務　局　長	坂本　融治（吉備中）	
事 務 局 次 長	井原　正善（耐久高）	
会　　計	道津　良典（耐久中）	
局　　員	嶋田　成暁（藤並小）	三角　　佑（広　小）
	矢口　　剛（箕島小）	橋本　大地（八幡中）
	宮井　和哉（文成中）	北畑　清誠（箕島高）
	井本　　匠（箕島高）	
理　　事	福井　健太（田殿小）	三木　悠輔（糸我小）
	森　　明子（津木小）	脇村　直弥（耐久中）
	北川　雅敏（保田中）	井原　正善（耐久高）
	黒瀬　尊敏（耐久高）	
【専 門 部】		
専門部長	坂本　融治（吉備中）	
総 務 部	事務局に同じ	
研 究 部		
部　長	橋本　大地（八幡中）	
部　員	嶋田　成暁（藤並小）	矢口　　剛（箕島小）
	三角　　佑（広　小）	竹中　公紀（湯浅小）
	宮井　和哉（文成中）	友松　　晶（湯浅中）
	櫻井　　翼（湯浅中）	小畑麻理子（津木中）
	石川　大輔（吉備中）	
	上西　亞唯（有田中央高）	児島　洋幸（有田中央高）
	黒瀬　尊敏（耐久高）	
【会計監査】	加藤　好江（箕島中）	福井　健太（田殿小）
【顧　　問】	有田地方教育委員会連絡協議会会長	前田　悦雄
	湯浅町教育委員会教育長	垣内　　淳
	広川町教育委員会教育長	池田　尚弘
	有田川町教育委員会教育長	片嶋　　博
	有田地方小学校校長会会長	愛須　一弘（山田小）
	有田地方中学校校長会会長	栃﨑　正幸（八幡中）

第４４回　和歌山県学校体育研究大会有田地方大会　開催要項

1　趣　　旨　「生涯にわたって、心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」を主題に研究実践を提案し、協議を行い、研修を深め、学校体育の更なる充実を図る。

2　主　　催　和歌山県教育委員会　和歌山県学校体育研究協議会

3　主　　管　第４４回和歌山県学校体育研究大会有田地方実行委員会

4　後　　援　有田地方教育委員会連絡協議会

5　期　　日　令和４年１１月１１日（金）

6　会　　場

校種等	場　　所	住　　所	電話番号
全体会	広川町民体育館	有田郡広川町広１４６９	０７３７－６３－１１２２
小学校	湯浅町立湯浅小学校	有田郡湯浅町湯浅１５７０	０７３７－６３－６５０１
小学校	広川町立広小学校	有田郡広川町広６３１	０７３７－６２－２０７６
中学校	湯浅町立湯浅中学校	有田郡湯浅町湯浅１８１５	０７３７－６３－５５３１
高等学校	和歌山県立耐久高等学校	有田郡湯浅町湯浅１９８５	０７３７－６２－４１４８

7　研究主題

『主体的・対話的で深い学びの実現を目指して』

○小学校　『子ども１人１人が運動のおもしろさを探求する授業』

○中学校　『課題を持ち、解決する力を高める授業』

○高等学校　『バドミントンにおける基礎動作の理解を深め、多様な状況に応じて対策を考える力を養う』

8　日　　程

9:30　9:50　10:40　10:50　12:10　13:15　13:30　16:00

受付	開会式 表彰式	休憩	特別講演	昼食 移動	受付	小 小 中 高	公開授業	休憩	研究協議

9　特別講演

演　　題　「　オリンピック選手から指導者となって考える主体的・対話的な深い学びとは　」

講　　師　竹澤　健介　先生（摂南大学専任講師・陸上競技部コーチ）

ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ　九鬼　靖太　先生（大阪経済大学人間科学部准教授・陸上競技部コーチ）

10　公開授業

校　　種	学　校　名	学　　年	授　業　者	領域（単元）	備　考
小 学 校	湯浅 小学校	第６学年	竹中　公紀	ボール運動 （バスケットボール）	
	広 小学校	第４学年	三角　　佑	体つくり運動 （一輪車）	
中 学 校	湯浅 中学校	第１学年	櫻井　　翼 友松　　晶	器械運動 （マット運動）	
高等学校	耐　久 高等学校	第１学年	黒瀬　尊敏	球技　ネット型 （バドミントン）	

11　研究協議会

校　　種	学　校　名	運　営	司　会	提　案	指導助言	記　録
小 学 校	湯浅 小学校	福井　健太 （田殿小）	小原　朋紀 （湯浅小）	矢口　　剛 （箕島小）	山田　充洋 （県教育委員会 指導主事）	岡本　有平 中村　太記 （湯浅小）
	広 小学校	嶋田　成暁 （藤並小）	寺村　太樹 （八幡小）	三木　悠輔 （糸我小）	則藤　一起 （県教育委員会 指導主事）	北村　立貴 （田鶴小）
中 学 校	湯浅 中学校	脇村　直弥 （耐久中） 大西　春輝 （湯浅中）	北川　雅敏 （保田中）	橋本　大地 （八幡中）	小川　泰伸 （県教育委員会 指導主事）	石川　大輔 （吉備中） 岩垣　貴行 （石垣中）
高等学校	耐久 高等学校	井原　正善 黒瀬　尊敏 （耐久高）	井原　正善 （耐久高）	黒瀬　尊敏 （耐久高）	増野　彰 （県教育委員会 指導主事）	上西　亞唯 （有田中央高）

全　体　会

日　時　令和４年１１月１１日（金）
　　９時５０分～１２時１０分
会　場　広川町民体育館

１　開会式
（１）　開会宣示　　有田地方実行委員会　副委員長　森川　博司
（２）　開会の言葉　　有田地方実行委員会　委 員 長　上野山達也
（３）　あいさつ
　　和歌山県教育委員会　　教育長　宮﨑　　泉
　　和歌山県学校体育研究協議会　　会　長　森　　文哉
（４）　来賓祝辞
　　広川町　　教育長　池田　尚弘
（５）　主催者紹介
（６）　次期開催地あいさつ
　　海草地方実行委員会　　委員長　和田　通尚
（７）　閉会宣示

２　表彰式
（１）功労者並びに表彰者の紹介
（２）表彰
（３）被表彰者代表謝辞

３　特別講演
　講師紹介　　副委員長　森川博司
　演　　題　　『オリンピック選手から指導者となって考える
　　主体的・対話的な深い学びとは』
　講　　師　　摂南大学専任講師・陸上競技部コーチ　竹澤　健介

４　全体会閉会

分　科　会

湯浅町立湯浅小学校

『主体的・対話的で深い学びの実現を目指して』

～子供１人１人が運動のおもしろさを探求する授業～

授　業　者	竹中　公紀
学年・領域（単元）	第６学年・ボール運動（バスケットボール）
運　営	福井　健太（田殿小学校）
司　会	小原　朋紀（湯浅小学校）
提　案	矢口　　剛（箕島小学校）
指　導　助　言	山田　充洋（県教育委員会）
記　録	岡本　有平（湯浅小学校）
	中村　太記（湯浅小学校）

1　提案内容

〈有田地方学校体育研究会小学校部会の取り組みについて〉

※広川町立広小学校分科会の提案も兼ねる

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して」

～子供１人１人が、運動のおもしろさを探求する授業～を研究主題とし、研究を進めている。

【主題設定の理由】

小学校体育科の目標は、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」と示されている。資質・能力の育成のためには、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から授業改善を図る必要がある。そこで、深い学びの実現に向けて、体育科における「する・みる・ 支える・知る」の多様な関わり方と関連付けることが重要である。有田地方では、運動やスポーツには、「する・みる・支える・知る」といった多様な「おもしろさ」があり、「おもしろさ」に子供１人１人が自ら気付くことができれば、「主体的・対話的で深い学び」になると考える。「する・みる・支える・知る」に応じた手立てを取り入れていくことで資質・能力が育まれ、豊かなスポーツライフの実現につながると考え、主題を設定した。

【研究の方法】

①　研究授業。コロナ禍で、研究授業を参観する回数が少なくなったが、授業のDVD視聴や紙面報告という形をとり、研究を進めてきた。

②　中学校との交流。小学校の教員が中学校の研究協議に参加したり、中学校の教員が小学校の研究協議に参加したりして、意見を交流してきた。

③　研修会。研修会では、体育科における見方・考え方を学ぶために、実技研修を行ったり、実践報告をしたりした。

【研究の成果】

「する」では、準備運動で、主運動につながる動きを取り入れ、今までの学習を想起させた。また、自分に合った課題を選択して、解決できる場を設定した。その結果、子供の姿は、今まで学習してきた技能を活用し、身に付けようと運動をする姿が見られた。また、自分の課題に応じて練習の場を選んでいた。「みる」では、ICT機器を使ってレベルの高い動画や友達の演技を見せた。また、演技や練習中のそれぞれの立ち位置と役割、見る視点を与えた。その結果、子供の姿は、自分の動きと友達の動きを比べながら、動画を見ていた。また、視点を与えたことで、視点に沿って友達の動きを考えながら見ていた。「支える」では、アドバイスや声かけなどを視覚化したカードを作成した。また、グループ編成を必要に応じて意図的に行った。その結果、子供の姿は、アドバイスカードを使って、声かけをしていた。また、よい点や改善点を付箋に貼り、お互いに声かけをしていた。生活グループや等質・異質グループを使い分けることで、支え合いながら活動をしていた。「知る」では、教える場面・自分たちで考えさせる場面を工夫した。また、ICT機器やワークシートを活用した。その結果、子供の姿は、ふり返りで運動の特性や動き方のポイントを理解している記述が多くなった。また、自分の成果や課題を振り返っていた。

【研究のまとめ】

成果の１つ目は、「する・みる・支える・知る」のおもしろさを感じることができる指導計画や手立ての工夫をしたことにより、興味や関心が高まったり、対話の中で新たな考えに気付いたり、課題解決に向けて試行錯誤を重ねながら考えを深めたりするなどの子供の姿が様々な場面で見られた。２つ目は、振り返りには「みる・支える・知る」についての記述が増えた。課題の１つ目として、今回の研究では、教員側が「する・みる・支える・知る」を意識していただけだったので、今後は、子供にも、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を位置付けていくことも必要だと考える。２つ目は、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けることにより、おもしろさを子供に気付かせるためには、運動の特性を理解し、手立ての幅を広げなければならないと感じた。今後も有田地方の教員の体育の授業力向上を目指して、互いに実践を交流していく。そして、子供たちがおもしろいと思える授業になるように、研究を続けていく。

２　研究協議

〇授業者より

バスケットボールは必要となる要素が多く、児童がしなければいけないことも多い。そこで、運動が苦手な児童も意欲的に取り組むことができるよう、ドリブルをなくし、オフェンス３人ディフェンス１人の攻撃有利の簡易化したゲームを行うようにした。その結果、技能が低い児童も活躍の場ができ、意欲的に取り組むことができるようになった。一方、ディフェンスを１人にしたことで、攻撃側があまり動かずに得点できてしまうこともあった。

本時については、ボールを持たない２人の動き方のポイントを考える授業を行った。考える視点として、２人の位置関係がどうなればパスを上手く通せるのかを考えさせた。グループによって積極性に差が見られたので、教師の声かけによってやる気を出してあげられるとよかった。よい動きをしているグループがあったので、全体でその動き方を共有できると、他のグループもその動き方のよさに気付き深い学びにつなげることができた。

○質疑応答

橋本市　教諭

【質問内容】

①　ボールを持たない位置関係で、先生は子供たちからどのような答えを引き出したかったのか。

②　ディフェンスが１人だったので、オフェンスが動く必要性という点で小さかったのではないだろうか。

【回答】

①　２人が同じ方向に動いてしまうと、ディフェンスがしやすくなる。基本的には１人が右に動いたらもう１人は逆方向に動く。パスを出す人によって、もらう距離を考える。

②　以前は、攻撃３人守備２人のゲームを行っていたが、技能面の差が大きく出てしまい、得点があまり入らず児童が意欲的に取り組めなかった。誰もが楽しく取り組むことができるよう、得点が入りやすくした。ディフェンスによって、オフェンスが動く必要性に差は出るが、誰もが活躍できるという点ではよいところもある。

和歌山市　教諭

【質問内容】

①　最終どんな姿をイメージしていたのか。

②　練習と試合のボールが違ったのはなぜか。

③　最初の練習のグループと試合のグループの違いは何か。

④　バスケットボールの運動の特性とは。有田地方の先生方ではどのように捉えているか。

【回答】

①　自分達で空いているスペースを見つけ、パスをつないでゴールし，仲間と喜びを分かち合える姿を育成したい。

②　突き指などの怪我を防止するために全て試合用の少し柔らかいボールで行いたいが、予算的に買うことができない。シュートやパスなどの基礎練習は、たくさん行いたいので、硬いボールも使いながら行っている。

③　最初の基礎練習は、毎時間同じグループで行うことでチームの説明などを省き、スムーズに行うことができる。ゲームでは、練習で話し合ったことや気付いたことを様々な相手に試すために対戦相手を変えている。

④　夏休みに、学教研のメンバーで集まりバスケットボールについての運動特性について話し合った。リバウンドやドリブル、アシストや作戦など様々な要素がある中で、シュートを打ってゴールを決めた喜びがバスケットボールの面白さにつながるのではないかと考えた。そのために、ディフェンスの人数を減らしてシュート機会を増やすことも一つの方法ではないかという考えになった。その中で，高学年では「ゴール型」の特性である、ボールを持っているときの動きと持っていないときの動きを考えさせたり、ボールをつなげたりすることが大切ではないかと話し合った。

橋本市　　教諭

【質問内容】
　有田地方では、体育の研究に関わっていない他の先生にどのようなアプローチをしているのか。

【回答】
　解決方法がまだない。有田地方の学教研では活発に活動を行っており、小学校では年３回公開授業を行い、学教研以外のメンバーにも来ていただいている。それだけでは集まらない時期もあるので、実践例をまとめ各学校に配布し、活用していただいている。実際に読んでくれているかは、分からないのが現状である。学教研の体育のメンバーが増えていけば、その先生方を中心に体育の授業についての様々な考えを広めていくことができると考えている。

和歌山市　教諭

【質問内容】
　シュートゾーンを設けなかったのは、どうしてか。

【回答】
　児童の様子を見る中で、動きも活発になってきており、シュートもたくさん打つことができていたので、シュートゾーンを設けてしまうと、そこに移動する動きばかりになってしまう可能性があったので設けなかった。また、試合の中でシュートを打つ距離や角度にも気付き思考してほしかった。振り返りには、シュートの距離が遠くて入らなかったなどの記入があった。

【質問内容】
　タブレットの活用の仕方はどうしているのか。

【回答】
　授業の中で撮影し視聴すると活動の時間が大幅に減少してしまうので、撮影した動画を Teams にアップロードし、朝の会や休憩時間などを活用して見るようにしている。

○指導助言

　竹中先生と何度か指導案について話をする中で、本当に３対１でやりますかと尋ねると、「やるんです」と熱い思いを持って答えられた。先生が児童の実態を見て、授業作りをされた結果、児童は生き生きと活動することができていた。
　学習指導要領には、高学年の「ゴール型」には、「攻撃側にとって優しい状況の中で作戦に基づいた位置取りをするなどの攻守入り交じった簡易化されたゲーム」ということしか記載されていない。人数や用具などについては一切記載されていない。簡易化されたゲームは、児童の発達の段階を踏まえて設定すると記載されているので、本時の３対１のゲームの中でもよい点はたくさんあった。
　授業を作る中でねらいを焦点化することは大切である。「指導と評価の一体化」に関する参考資料にも、ねらいを必ず定めて、まとめまで行い指導と評価を一体化するということが重点化されているので、普段の授業から行っていただきたい。

課題としては、指導要領に記載されている「集団対集団」という言葉に関しては、不十分では無いかと考えられる。高学年だけでなく、中学年や低学年においても「集団対集団」という表現がある。中学校の「球技」へつなげるための活動として、ハーフコートとオールコートの違いは大きい。今後、「サッカー」などでオールコートの中で攻守の切り替えなどを学ばせる必要がある。

技能面では、ワンドリブルがあればシュートを打つことができる状況でも、ドリブルの制限があることでシュートにいけない場面が見られた。指導要領にも取られない場所でのドリブルという記載があるので、ドリブルを使えるようになるともう少し攻撃のバリエーションが増える。それにより、ディフェンスも変わってくる。ディフェンスが変わってくればオフェンスも変わってくるというよい循環が生まれてくる。ドリブルは難しくて敬遠されがちであるが、ドリブルの必要性も分かっていただきたい。

３対１にすると、ディフェンスがとても不利になってしまうので、ディフェンスの中での学びが上手く活用できず、意欲の低下につながってしまう危険性がある。作戦については、バスケットボールは相手の状況によって、作戦が変わることが多いので複雑で難しい。教師側があらかじめ基本的な動きの例を提示してあげ、その中から児童に選ばせてあげることも大切である。

分　科　会

広川町立広小学校

『主体的・対話的で深い学びの実現を目指して』

～子供１人１人が運動のおもしろさを探求する授業～

授　業　者	三角　佑
学年・領域（単元）	第４学年・体つくり運動（一輪車）
運　営	嶋田　成暁（藤並小学校）
司　会	寺村　太樹（八幡小学校）
提　案	三木　悠輔（糸我小学校）
指　導　助　言	則藤　一起（県教育委員会）
記　録	北村　立貴（田鶴小学校）

1　提案内容

湯浅町立湯浅小学校　参照

2　研究協議

〇授業者より

体育の授業から特色ある学校を作ることが大きなテーマである。広小学校は一輪車が一つの大きな特色となっている。そこに加えて有田地方の研究である、「する」「見る」「支える」「知る」の視点から運動のおもしろさを考えて授業を組んだ。本時では運動のおもしろさ・一輪車のおもしろさについて、児童にアンケートをとったところ「何回もこけたけど初めて乗れた時」「一輪車検定の級が上がった時」におもしろさを感じたと答えた児童がいた。また、全員が一輪車は得意と答えた。

広小学校における一輪車の取組は２００４年から始まった。初めは運動会の組体操の一部であった。その目的は自分の特技を見てもらうことであった。体育科での取組は、「得意な子が苦手な子を支える」「他のグループの演技を見る」という視点で一輪車を取り入れ、授業を組み立てている。４０人で行う技など、運動会で児童の考えた技を取り入れることもしている。授業以外においても休憩時間に運動場で練習に取り組んでいる。５・６年や教師が見守り、アドバイスするなど、学校全体で取り組んでいる。１年生から一輪車に触れ、高学年になるにつれ技術が上がったり、低学年が６年生を見て目標にしたりすることができている。支えるという意味では、一輪車協会の方に年間数回来ていただき、専門の知識を教わったりもしている。また、今後も継続して取り組んでいけるように、一輪車検定の取組も行っている。児童はできる喜びやおもしろさ、目標をもって取り組む気持ちをもつことができている。道具・備品の準備を計画したり校務分掌に一輪車を取り入れて活動したりもしている。子供たちの遊びの中に一輪車があることが技術の向上につながっている。体育での学びを遊びの中に生かしていることが、広小学校の大きな成果であると考えている。授業や遊びで一輪車を「する」、運動会などで演技を「見る」、その演技を見た児童が教え合う「支える」ことができている。

質疑応答

和歌山市　教諭

【質問内容】
取り組む技がずっと同じ技であったので、設定時間が長いのではないか。途中で区切ってみてはどうか。意図はあるのか。

【回答】
同じ技に取り組むことは悩んでいたが、技にこだわると指導要領の体つくり運動の内容を越えて、表現運動になるのではないか。同じ技に取り組んだが、１時間の授業では、最初と最後で変化があったのはよかった。

和歌山市　教諭

【質問内容】
苦手な児童、乗れない児童はいるのか。

【回答】
現状、４年生から６年生まで補助ありの児童もいるが、全員乗ることができる。１、２年生の頃に集中して取り組んでいる。一輪車協会とも協力し、効果的な教え方を研究している。

田辺市　教諭

【質問内容】
グループの意図はあったのか。グループ内で何を工夫しているのか共有できていたのか。

【回答】
技能面・人間関係は関係なくグループを組んだ。失敗が続くとできるための工夫やアドバイスを行っていた。工夫については、グループ内で言えていればよい。時間内に共有できない時は教室内にスケッチブックを置いてアドバイスや工夫を共有している。

海南市　教諭

【質問内容】
発表の際、テーマに沿った曲をかけてみるのはどうか。

【回答】
体つくり運動という観点からも曲を使ったものにはしない。「支えてもらってよかった、嬉しかった」を大切にしている。表現運動にならないようにしていた。

海南市　教諭

【質問内容】
自分たちの姿を、ICT を活用して映像で振り返ってみるのはどうか。

【回答】
ICT を使用すると現状では運動量が減ってしまうので意図的に使用していなかった。

海南市　教諭

【質問内容】
　グループのめあて、個人のめあてはあったのか。

【回答】
　技能差がある中で「工夫があったからできた」「できない子でもグループ内でピースとなって活躍できた」を目標にめあてを設定している。

東牟婁地方　教諭

【質問内容】
　グループへの声かけをどのように行っていたのか。

【回答】
　難易度をそこまで上げない声をかけていた。

○指導助言

　体つくり運動か表現かということについては、曲を用いると表現の演技・技になってしまう。バランスをとりながらやる、リズム・速さを変えることで移動の仕方を工夫する等、基本的な動きを組み合わせること自体が一輪車では体つくり運動になるのではないか。「どうやったらこうなるのか」「人数は二人がよいのか」「手をつないでみよう」というところが大切である。

　本時の声かけでは、技ありきであったので、工夫できる視点があった。カリキュラムにおいては、３・４年生では、体つくり運動で、乗る・バランスをとる・人数を工夫していくというところに重きを置いていったらよいのではないか。単元の後半で運動会に向けての表現運動に取り組んだらよいのではないか。

　関わりについては、グループ内で工夫を共有していく。体の気付きという面で視点を「リズム・速さ・方向・人数の工夫」などにして、まとまるようにしていく。

　めあてについては、和歌山県のめあて３箇条を大切に、振り返りの視点も大切にしていく。体育カードの振り返りも、「考えたこと・できたこと・頑張りたいこと」などの視点で書かせると、めあてと振り返りの整合性が出てくる。

　グルーピングに関しては、ランダムでできることはすごい。乗れない子が少なかったため、今回はよかった。

　ICT の活用に関しては、活用できてもよかったと思うが、今回は子供たち自身が単元の最初と本時とで価値付けすることができていた。見せる表現ではないので、「見せられた・できた」という思いを自分達でもてていればよいと思う。今後は振り返りを録音することで活用することもできる。

　学校全体で体育に取り組むという点においては、全校集会で高学年が発表したり、きのくにチャレンジランキングを活用したりすることで全体での取り組みにつなげることができる。

　体育は楽しく・安心して取り組むと、指導要領にも書かれている。結果として体力の向上につながっていくので、今回のような活動を取り入れることで、全体の中でバランスをとっていくことがよいのではないか。

分　科　会

湯浅町立湯浅中学校

『主体的・対話的で深い学びの実現を目指して』

～課題を持ち、解決する力を高める授業～

授　業　者	櫻井　翼　友松　晶
学年・領域（単元）	第１学年・器械運動（マット運動）
運　営	脇村　直弥（耐久中学校）
	大西　春輝（湯浅中学校）
司　会	北川　雅敏（保田中学校）
提　案	橋本　大地（八幡中学校）
指　導　助　言	小川　泰伸（県教育委員会）
記　録	石川　大輔（吉備中学校）
	岩垣　貴行（石垣中学校）

1　提案内容

【研究主題】

主体的・対話的で深い学びの実現を目指して
～課題を持ち、解決する力を高める授業～

【設定理由】

中学校保健体育科の目標は、「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」と記されている。学習指導要領では、この資質能力について「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の３つに整理されており、それらをバランスよく育成することが求められている。また、資質能力の３つの柱の育成に向けて、「課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して」相互に関連させながら高めることが重要であるとも記されている。

そこで有田地方では、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」それぞれの視点から授業改善を行うとともに、課題を発見し解決する学習を適切に授業内に取り入れることで、資質能力が育まれ、豊かなスポーツライフの実現につながると考え、研究主題を設定した。

【研究方法】

研究授業では、コロナ禍ということもあり、ここ２年間は紙面発表や授業動画視聴という形で行ってきた。しかし、今年度からは研究授業を参観して研究を進めてきた。研究協議についても、小学校研究部と協力し、互いの校種の研究協議にも参加し意見交流をしてきた。

【研究の成果】

主体的・対話的で深い学びについては、まずは主体的な学び・対話的な学び・深い学びが、それぞれ授業ではどのような場面か、全員で捉え直し、授業改善に役立てた。

「主体的な学び」については、生徒の興味関心を高める工夫や、粘り強く取り組める手立て、めあてや流れを可視化し見通しを持たすこと、自分自身で振り返り、それを次の授業に生かすなど、その授業に合わせて取り入れ、主体的な学びにつなげました。

「対話的な学び」については、他者と考えを共有、比較する時間の確保、多様な手段を用いて自身の思考を表現する場を設ける、既存の知識や考えをもとに新たな考えを作り出す活動、友達と協働して課題解決する場面などを通して対話的な学びにつなげた。

最後に「深い学び」については、新たな知識や技能を習得、習得した知識や技能を活用、また次の知識や技能の習得につなげるといった、習得・活用・探究のサイクルを単元の中で常に取り入れることや、自分の動きや思いを既存の知識や考え、共通の言葉などと結びつける時間、表出した考えを問い返し、思考を止めさせない

工夫など、以上のような授業改善を行うことで深い学びの実現につなげた。
　次に、「課題を発見・解決する学習過程」については、課題を発見・解決する学習過程は次のようなイメージで取り組んだ。①課題設定　②その課題に対する情報収集　③収集した情報を整理し分析　④分析結果をまとめ、考えの創造や表現　⑤活動　⑥振り返り、その後また①の課題設定につなげていく。もちろんこのように常に順序よく進むこともなく、内容によっては順序が前後したり、複数のプロセスが同時に行われることもあった。このような過程を、単元を通して何度も何度も繰り返し、スパイラル的に高まっていくよう取り入れ、資質能力の育成につなげた。
　「指導と評価の一体化」については、主題に則り研究を進めていく過程で、その重要性を再認識し、毎回意識して協議してきたものです。主体的・対話的で深い学びは１時間の中で全て取り入れて完結しなければいけないものではなく、単元やまとまりを通して適切に計画していく必要があると考える。教師は前述したように、主体的な学び、対話的な学び、深い学びの視点で授業改善をする必要があるが、ただただその活動を取り入れるだけといった、そこを目的にしてしまった場合生徒の学びと遊離してしまう可能性がある。また逆に、協議会で生徒の学びについて議論を行っていても、その授業で身につけたいことが何か、教師間でずれが生じることも多々ある。

　以上のように教師、生徒どちらか一方だけが大切なのではなく、双方を往還することで、主体的・対話的で深い学びの実現につながってくると考えられる。そのため教師は、単元を通して、また１時間の中で何を身につけさせたいのか、どのような姿になって欲しいのか明確にして授業をデザインする必要がある。そのゴールに向かって最適な授業改善を行い、生徒の学びとずれがないか評価し、次の指導につなげていくことが重要である。
　以上のことから有田地方では、ゴールに向かってその授業の計画は適切かどうか再考するなど指導の改善と、授業でルーブリックを示すなどして生徒も自身の学びを改善できるよう工夫してきた。

【まとめ】
＜成果＞
○　主体的な学び、対話的な学び、深い学び、それぞれの視点を明確にし、授業改善を行ったことで、その時間の学びやめあてを達成するために適切な活動や手立て、場の設定を選択できるようになり、意図した学びにつながりやすくなった。
○　生徒のつまずきとして、習得した知識や技能がどこでどのように活用するのかわからないといったことがある。課題発見、解決する学習過程を取り入れることで、既存の知識や技能とそれを活用する場面、新たな知識が思考などと結びつくようになった。また、学習を振り返るとともにそれを考察し、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなど、主体的に学びに向かう姿も見られた。
○　生徒、教師双方のレベルアップにつながったこともある。指導と評価の一体化を意識して授業をデザインすることで、生徒たちは学んだことをしっかり評価さ

れるようになり成長を実感しやすくなった。また、この視点が重要視するようになってから協議会の質がグッと上がったように感じる。

＜課題＞

○　生徒のよりよい学びに向けて、こんなことも学んでほしい、ここではこういう対話が生まれてほしいなど、授業をデザインする段階でどうしても欲が出てしまい、研究授業の中でも、よいとされる活動を多く盛り込んだためゴールまで届かなかった。もしくは違う方向に行ってしまったことが見られた。単元、１時間で何を身に付けさせたいのか教師がしっかりと持ち、そのために必要な活動を取り入れるために不必要なものを取り除くことも大切だと感じた。

○　生徒たちの取り巻く環境が大きく変化しているため、答えが一つのものや調べたらすぐわかるような課題では、生徒たちは楽しさや喜び達成感を味わいにくくなっている。学んだこと、習得したことをどう活用するのか、どう表現するのか、そのような課題設定をする必要があると考える。

以上が、有田地方学校体育研究会中学校部会の研究報告となります。

２　研究協議

○授業者より

【湯浅中学校の取り組み】

主体的・対話的で深い学びを実現するために、体育や保健の見方・考え方を働かせることを通した授業作りを実践している。保健体育科においても、単元を通して育てたい資質に応じ、毎時間の着眼点を設定している。

学習指導要領にはマット運動では、「回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることが求められている。滑らかに安定して行うことができ、基本的な技を発展技につなげるために大きな前転が大切であると考えた。

そこで単元を通して大きな前転が全ての技に発展していくことを子供たちに明確に示した。今回は前転グループでは開脚前転や倒立前転、スーパー開脚前転や伸膝前転を単元計画に入れたが、全ての基本を大きな前転として、少しずつ発展させてきた。

その中で大きな２つの課題として、「伝動」を高めること、「順次接触」をより滑らかに行うことを設定している。

毎時間の授業で技の条件が変化していく中で、何に意識を置いて取り組めばよいのかを明確にし、その時間で課題解決に迫る見方を働かせ、活動を行っている。例として、大きな前転から開脚前転に発展させるときに、開脚した姿勢を側面から見た図を書かせることで、活動時に生徒自身が課題解決に向けた視点を持つことができ、技の成功につながるアドバイスをしたり、ポイントを確認し合ったりすることができ、主体的・対話的で深い学び合いとなっている。

もちろん初めの頃は、自分のグループに割り当てられたマット内で活動をし、ア

ドバイスも「腰が低いよ」などの内容だったが、今ではグループの枠を越え、「今のは腰が低かったからもう少し最初の足をしっかり蹴ろう」というアドバイスや、「足が地面から離れてすぐ開いているから着く寸前まで我慢して開くのを意識してみて」など、具体的な改善策を発言している生徒も増えてきている。

授業内容の伸膝前転は１年生で扱う技にしては難易度が高いという声もあったが、大きな前転から技が発展していくことや、伝動・順次接触が全ての技ができるための要素であることを確認し、今は発達段階により筋力的にできない技であっても、マット運動の芽を育てることが重要であると考えて取り入れた。今は数名の生徒しかできなくても、もう少しでできそうな生徒や、起き上がりの腰の位置が高くなっていくことで、次の学年につながるようにと考えている。

評価については、技ができることも大切だが、「できそう」や、少しできるようになった時の思考・判断・表現を重視している。そして、ワークシートの格言や感想で狙いの伝動に迫れているか、図で伝動を高めるための前屈がしっかり意識できているか、授業中の発言としては伝動を高めることにつながる発言をしていたか、アドバイスをしているかなどで判断している。

【授業の反省点】

単元設計、本時のめあてや発問、それに向かう声かけが適切であったか。めあてに迫るためのアプローチ方法やグループでの活動方法に対する意見などをいただき、深めていけたらと考えている。

○質疑応答

和歌山市　教諭

【質問内容】
○　運動量豊富
①　班の構成の意図は
②　シートの意図は
③　あえて絵を描く意図は

【回答】
①　倒立前転から編成で　グループはあってないようなものとしている。
②　見方、考え方の「見方」について理解を深めるために、その姿勢であっているのかどうか　頭の中でのイメージつくりのため。
③　自分で描くことで理解を深めるため。

岩出市　教諭

【質問内容】
①　前転や後転もできない生徒はどう対応しているか

【回答】
①　ポイントを絞ってやっていく中で、イメージができるようにした。また、転がれない生徒にはスモールステップをもって指導した。

田辺市　教諭

【質問内容】
①　今後のビジョンは

【回答】
①　最後はシンクロマットへの挑戦。発展技の挑戦を経て、それぞれの技を持ちより、自分たちの演技をつくる。

海南市　教諭

【質問内容】
①　教師２名でずっと指導しているのか
②　器械運動での男女共習についてどう考えるか

【回答】
①　年間を通して２名で行っている。
②　身体的な接触があるため、男女同グループは避けている。グループでというよりマットを分けているという感覚である。

紀の川市　教諭

【質問内容】
①　器械運動の他の３競技についてはどう取り扱っているか

【回答】
①　２年次で跳び箱運動、３年次でマット運動でシンクロマットを行う。平均台、鉄棒は物理的にできない。

和歌山市　教諭

【質問内容】

①　男女共習について、器械運動は身体接触が少ないのではないか？どのような身体接触を想定して？

②　ほかの授業では共習をどうしているか

【回答】

①　補助などで体を触る場面があるから、マットの数で分けている

②　陸上・バレーでは共習

（その他の意見）

○　すべての単元でやっている

○　共習をすることに関しては、保護者のクレームもある

○　学校全体での取組としてやっており、不都合が出たら、それをどう乗り越えていくかを考えて動く

→主体的な活動

○　共習で球技等の恐怖心や思い切りやれないところをどうすべきか

→今後への課題

○指導助言

○　男女共習について

男女共習の捉え方として、普段の学校生活の場面から関わりをもつ機会を増やすことが必要である。

開脚前転は女子の方が、柔軟性があって上手な生徒も多いので、手本を見せてもらい全体で共有する場を作ることも大切である。

授業の初めのサーキットトレーニングを他の単元でも実施する。継続して行うことで、筋力アップや持久力アップにつながる。

場の工夫として四角形にマットを配置し、真ん中に補助具を設置していたのはよかった。補助具はスモールステップをするために積極的に活用してほしい。

○　授業について

安全面への配慮として、体調確認や服装を整えるよう声かけをしていたのはよかった。

マット運動が苦手な生徒には、先生が補助をして成功体験を味わわせることで、主体的に取り組むようになり、成長につながる。

ＩＣＴの活用として、見本となる生徒の動画を撮り、グループで共有していくことが大事。

現行の学習指導要領を端的に言えば、「豊かなスポーツライフを実現するために、スポーツを通した共生社会を推進する」である。３つの柱（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「学びに向かう力・人間性等」）により育成を目指す、資質・能力が明確化されているので、今後の授業に生かしてほしい。

分　科　会

和歌山県立耐久高等学校

『主体的・対話的で深い学びの実現を目指して』

～バドミントンにおける基礎動作の理解を深め、

多様な状況に応じて対策を考える力を養う～

授　　業　　者	黒瀬　尊敏
学年・領域（単元）	第１学年・球技　ネット型（バドミントン）
運　　営	井原　正善（耐久高等学校）
	黒瀬　尊敏（耐久高等学校）
司　　会	井原　正善（耐久高等学校）
提　　案	黒瀬　尊敏（耐久高等学校）
指　導　助　言	増野　　彰（県教育委員会）
記　　録	上西　亞唯（有田中央高等学校）

1　提案内容

主体的・対話的で深い学びを目指した授業（球技　ネット型　バドミントン）

2　研究協議

○授業者より

耐久高校でしかできない（６５分）授業を考えた。いろんな練習・時間配分・生徒の特徴を理解し、基礎的な動作から、練習→ゲーム練習に展開し、最終空いているスペースを狙えるようにする。基礎的な動作から、実践的な動作の習得を目指す。運動が苦手な生徒でも、発表やタブレットに記入することで表現できるきっかけを与えられた。これからもいろいろな生徒に合わせた授業をしていきたい。

○質疑応答

紀の川市　教諭

【質問内容】

①　手首（リスト）の使い方の指導方法

②　学習カードの点数のつけかた

【回答】

①　ネットなしのラリーで自然と面に当てラケットを振れるように指導バックハンドは親指を立ててGoodの手で胸に当て、肘を伸ばし天井に親指を向けるよう指導

②　ラリー（初回）の回数を基準にA・B・Cの3段階でつける

かつらぎ町　教諭

【質問内容】

①　グラウンドでのタブレットはどう使用するか

②　２対１ではなく３対１での効果

③　ラリーの記録の評価

④　グループの分け方（男女比）

【回答】

①　グラウンドでの使用方法については思考中

②　運動量の確保のため

③　タブレットは普段から見れるのでライバル心を燃やすきっかけになる、一括で評価できる

④　お互いで話し合いながら、生徒たちで決める

○指導助言

○　ラリーの評価は、自主的に取り組むことにつながる ○　試合の勝敗で評価はしないで、学習カードと観察で思考力・判断力・表現力につなげる ○　タブレットの使い方に関しては、今後よい手立てを考えていく ○　３対１について、返球の高さ・位置を工夫し、相手の動作をいかに崩すかを考えていく ○　指導と評価の計画を基準とし、体育科で話し合っておく ○　65 分授業を工夫し、よいモデルとして活用してほしい ○　男女共習の集団でのテーマなので、生徒達にルールを考えさせるのはよいこと生徒の発言を拾って広げていく ○　生徒もしっかり動いていたので運動量は確保できていた ○　グループワークを導入することで、一人一人の違いを大切にしている（共生） ○　コーチ役、選手役で役割分担をして話し合う場を作っていくことが共生につながる